

イスラーム短編小説の広がりと インドネシアの女性たちのイスラーム覚醒

野 中 葉

Popularity of Islamic Short Novels and Islamic Awakening among Muslim Women in Indonesia

NONAKA, Yo

This presentation clarifies the role of Islamic short novels in Islamic awakening among Muslim women in Indonesia in the 1990s and early 2000s. It is based on data gathered by field researches on writers, publishers, and readers, as well as analysis of the storylines and texts of the novels.

Many Islamic short novels started to be written in the early 1990s under the secular Suharto regime and were read by female high-school students and college students. Factors including economic growth, increase in educational level, and development of publication media during the Suharto era contributed to a rapid increase in the number of women who read books and novels. At the same time, learning Islam and *dakwah* activities became popular among college students all over the country against Suharto's tyranny and the inflow of Western culture. As a result, young female elites who learned Islam voluntarily and were conscious of its teachings appeared and they became the driving force behind the popularity of Islamic short novels.

At the beginning, these novels were published in a magazine called *Annida*. It was first published in 1991 by some female students in the Faculty of Literature, University of Indonesia in Jakarta who joined the student *dakwah* organization there. From the beginning, it was known as a female literary magazine especially focusing on Islamic short novels and read by young Muslim women across the country. After the Suharto regime collapsed in 1998, the novels that had already gained popularity among the readers of *Annida* came out in book form in quick succession and became big hits.

The writers of these Islamic short novels were young Muslim females who started turning towards Islam. Some of them joined Islamic *dakwah* activities in their universities and started wearing Islamic veils. Their novels showed their enthusiasm for Islam and their own experiences with learning and turning towards Islam such as changes of relationship with their families and friends. They wanted to deliver the Islam that they had learned and to share

Keywords: Islam, Indonesia, Muslimah, novel, awakening
キーワード: イスラーム, インドネシア, ムスリマ, 小説, 覚醒

their experiences using the topics and slang expressions familiar to them. The readers were also young females in similar circumstances to the writers. They read these novels to reaffirm and justify their new commitment to Islam. The Islamic short novels verbalized the awareness of both writers and readers who spontaneously incorporated Islam into their lives.

- | | |
|--|---|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. はじめに <ol style="list-style-type: none"> 1.1 問題設定 1.2 先行研究 2. イスラーム短編小説の流行 <ol style="list-style-type: none"> 2.1 時代背景 2.2 イスラーム短編小説専門雑誌『アニダ』 | <ol style="list-style-type: none"> 2.3 単行本全盛期 2.4 人気の終焉 <ol style="list-style-type: none"> 3. 作品分析 <ol style="list-style-type: none"> 3.1 「ガガ兄さんが旅立つ時」 3.2 「イムット」 3.3 イスラーム短編小説の特徴 4. まとめにかえて |
|--|---|

1. はじめに

1.1 問題設定

インドネシアの書店に足を踏み入れると、イスラーム関連書籍の売り場に大きなスペースが割かれていることに目を奪われる。民主化や経済発展と共に、社会のイスラーム化が進展している現れの一つとして、イスラーム関連書籍に対する需要の高まりと広範な流通は、各種メディアにも、研究者たちにも、しばしば指摘されてきた。本稿で扱うのは、1990年代から2000年代初頭にかけて、若い女性たちの間で多く読まれたイスラーム短編小説である。

イスラーム関連書籍が大量に市場に流通し、読まれるようになったのは、長期権威主義体制として知られるスハルト体制が安定期を迎えた1980年代以降のことである。この時期には、スハルト体制の経済発展や教育水準の向上や恩恵を受け、中間層やエリート

層が出現し、彼らの間で「イスラーム回帰」と呼べる事象が顕在化したとされた(中村1994ほか)。経済的な成功の証として、「スタイルとしてのイスラーム」の受容が見られたとの指摘がある一方(倉沢1996)、国立大学や公立高校の多くで、学内のモスクを拠点にイスラームを学ぶグループが出現した。流通し始めたイスラーム関連の書籍は、こうした学生たちのイスラーム学習の教材として、また活動の指針として広く読まれたのである。学生たちが好んで読み、彼らの活動を思想的に支えたのは、翻訳されたクルアーンその他、中東発の運動書や思想書であったとの指摘がなされてきた(Damanik 2002; 見市2004ほか)。

本稿では、この時期の、主として非イスラーム系の大学や高校で学んだ若い女性たちに焦点を当て、彼女たちのイスラーム覚醒に寄与したイスラーム短編小説の役割を論じる。幼い頃からプサントレン¹⁾やマドラサ²⁾などイスラームを学ぶ環境で育った人たちと異なる

1) プサントレン (pesantren) とは、インドネシアの伝統的な寄宿制のイスラーム教育施設。歴史的には、ジャワに多く存在し、キヤイ (kyai) と呼ばれるプサントレンを主宰する教師のもと、サントリ (santri) と呼ばれる生徒たちが寝食をともにしながらイスラームを学ぶ場である。

2) マドラサ (madrasah) は、伝統的なプサントレンにはなかった学級制やカリキュラムを取り入れ、また非宗教科目も教えるイスラーム学校を指す。

り、非イスラーム系の学校で育った彼女たちがイスラームを学ぶ機会は、非常に限られていた。結論を先取りして言えば、こうした女性たちがイスラームを受容する過程においては、男性たちを中心に読まれたインドネシア語に翻訳された中東発の運動書や思想書とは別に、彼女たち独自の指針、手段、媒体が必要とされており、そこではインドネシアで書かれたイスラーム短編小説が役割を果たしていた。このことを、作家や出版社、読者たちに対する現地フィールド調査、および代表的小説の作品分析から、検証していきたい。

1.2 先行研究

先行研究の成果によれば、1980年代以降、インドネシアではスハルト体制下で大衆文化や消費文化が発展し、文学の分野においても、大衆小説 (sastra populer) やポップ・ノベル (pop novel) が流行したことが知られている。このジャンルは、それ以前のナショナリズムや共産主義など特定のイデオロギーと結びついた、いわゆる純文学とは異なって、脱政治化、イデオロギーや抵抗の精神の欠如が顕著であった (竹下 2000)。また、この時期の大衆文化や消費文化の進展は、イスラームの広がりにも影響を与えているとする指摘が近年、見られるようになった。主に都市部の若者たちによって、イスラームの「ポップカルチャー化」や「商品化」が進展しているという研究が次々と出されている (見市 2006; Fealy and White 2008; Saluz 2009 ほか)。

本稿のテーマと関わりの深いイスラーム小説やそれを基にしたイスラーム映画の流行も、先行研究では主として、イスラームのポップカルチャー化や商品化の潮流の側面として、論じられてきた。Nilan は、イスラームと西欧グローバル文化との「ハイブリッド化」を論じた論文の中で、イスラーム短編小説を取り上げ、「シリアスなイスラーム的メッセージが、若者たちのスラングによって表現されている」ことを指摘してい

る (Nilan 2006: 106)。また、Heryanto は、イスラームのポップカルチャー化を論じる事例として、2000年代後半に大ヒットした映画『愛の章句 (Ayat Ayat Cinta)』を取り上げ、ムスリマの表象のされ方を考察した (Heryanto 2011)。Irawanto は、ポストスハルト期のイスラームメディアの増加と多様化を論じる一例として、本稿でも取り上げる雑誌『アニーダ (Annida)』に言及し、短編小説をメインに掲載しつつ、若い女性向けファッションやポップカルチャーもカバーする雑誌として論じている (Irawanto 2011: 76)。

一方、近年のインドネシア社会におけるイスラームの顕在化の流れの中で、ムスリマたちの活動や動きに特化した研究は、あまり多くない。目立っているのは、民主化やグローバル化の流れに呼応し、イスラームにおける女性の地位やジェンダー問題への関心が高まる中、こうした問題意識を持つイスラーム社会団体の女性たちの活動が論じるもの (White and Anshor 2008 ほか)、またその一方で、非イスラーム的環境に育った若い女性たちが、スハルト体制後期以降、先駆的にヴェールを着用し始めたことに着目し論じた、拙稿を含めいくつかの研究であろう (Brenner 1996; 野中・奥田 2005 ほか)。しかしながら、イスラーム短編小説を含む文学や、あるいはより広い範囲でメディアの役割に注目して、女性たち自身のイスラーム覚醒を論じる視点は、散見するところ先行研究には見られない。

世界的なイスラーム復興の流れの中では、メディアの役割がすでに評価されて、論じられている。イスラーム世界のニュー・メディアの台頭を論じたアイケルマンは、「アクセス可能で、馴染みの言葉を使って、イスラームが提示」される現象が世界各地で見られること、またそうしたイスラームの提示では、同時にイスラームの「教義や実践を再構成」が行われていることを指摘している (Eickelman & Anderson 1999: 12)。

本稿では、先行研究の成果を踏まえた上で、スハルト期末期からポストスハルト期にかけて、都市部の若い女性たちの間で見られたイスラーム受容に着目し、彼女たちによって書かれ、読まれ、そして彼女たちのイスラーム覚醒に貢献したイスラーム短編小説の役割を論じる。

2. イスラーム短編小説の流行

2.1 時代背景

1960年代後半に始まるスハルト体制では、「開発」と「安定」が達成すべき最優先の課題とされた。この2つの課題達成のために、障害となる可能性があると思われたあらゆる反対勢力は、イスラーム勢力も含め、厳しい監視と弾圧を受けた。同時に、人口の大多数を占めるイスラーム教徒たちを手なづけ、反乱分子になることを未然に防ぐ目的で、宗教が学校教育の中で必修化されたり、国家主導で各地にモスクが建設されるなど、官製のイスラームが押し付けられたのもこの時期である。その一方で、スハルト体制の開発の成功の恩恵を受け、経済成長と教育水準の向上が達成された。このような中、都市の若者を中心に、イスラームを学ぶ層が出現し、これが国立大学を中心とする「大学ダアワ運動」へと発展していった³⁾。大学でダアワ運動を組織し、主導した都市の若者のイスラーム受容の背景には、先行研究で指摘されてきた通り、クルアーンや中東発のイスラーム関連書の翻訳、出版、流通があった。こうした書籍の主要な読者は、大学でダアワ運動を志し、活動

した学生たちだったのである。全国に展開した大学ダアワ運動では、1980年代半ば頃から、中東のイスラーム同胞団の影響を強く受けたタルビヤと呼ばれる思想及びイスラーム学習形態が主流になっていった。タルビヤで学ぶ学生たちにとって、インドネシア語に翻訳され出版されたイスラーム同胞団関連の思想書や運動書は必読書であった。

大学ダアワ運動に参加した学生の中には、当然ながら女子学生たちも含まれていた。彼女たちは、それまでインドネシアで一般的ではなかったイスラームの教えに適ったヴェールを自発的に身につけ、活動に参加していった⁴⁾。スハルト体制下の教育水準と生活水準の向上に伴い、大学まで進学する女性エリート層が、インドネシア社会に初めて出現し、その中の一部が、イスラームに目覚め、クルアーンを読み、イスラームを学び始めたのである。

2.2 イスラーム短編小説専門雑誌『アニーダ』

先行研究でも論じられた大衆文学が一般的になり、またイスラームを学ぶ若い層が増え始めた1991年、イスラーム短編小説専門雑誌の『アニーダ』の発行が開始された。この雑誌は、大学ダアワ運動の一大拠点であるインドネシア大学文学部の学生ダアワ組織で活動していた女子学生たちが結集し、創刊したものである。設立時から『アニーダ』は、若いムスリマをターゲットに、イスラームの価値を伝えることを目指していた。

1993年頃からは、1980年代末からインドネシア大学文学部で学び、同学部のダアワ運

3) アラビア語で「呼びかけ」を意味する単語に由来するダアワは、インドネシア語では特に、「イスラームへの呼びかけ」を意味する。大学ダアワ運動とは、大学生たちがイスラームを学びながら、学内や周囲にイスラームを広め、それによって社会改革を目指そうとする運動を指す。スハルト体制下のインドネシアでは、この大学ダアワ運動が全国各地の大学に広がっていった(野中 2010a)。

4) インドネシアでは、伝統的に女性たちが頭に羽織るショールはクルドゥン(kerudung)と呼ばれてきた。しかしながら、大学でダアワ運動に参加した女子学生たちは、このクルドゥンが、必ずしもイスラームの教えに適うものではないという認識を持っていた。彼女たちは、イスラームの教えを遵守する意識から、自らヴェールを着け始め、これまでのクルドゥンとは区別して、クルアーンの章句から引用した単語を使ってジルバブ(jilbab)と呼び始めた。(野中・奥田 2005)。

動でも活動したヘルフィ・ティアナ・ロサ (Helvy Tiana Rosa) が編集長に就任し、誌面改革が行われた。その結果、特に中高生や大学生などの若い女性たち、つまりインドネシア語で「ルマジャ (remaja)」と呼ばれる年齢層の女性たちを読者層に設定し⁵⁾、物質主義やフェミニズム、快楽主義などによってイスラーム的価値から離れてしまった彼らを、イスラームの教えに戻すためのメディアを目指すようになった。そしてそのためのツールとして、イスラーム的小説や物語を主力商品として前面に出すようになったのである⁶⁾。創刊から2年間は、各号に2つから4つ掲載されるだけだった短編小説は、1993年の誌面改革以降、各号平均で9作品とその数を大幅に増加した。『アニーダ』編集部 の把握によれば、1991年から2001年までの10年間で、合計して約1600作品のイスラーム短編小説が誌面に発表され、読者に読まれていった (Helvy, ed. 2001: iii-v)。

本稿で論じるイスラーム短編小説とは、インドネシア語で短編小説を指す *cerita pendek* (略して *cerpen* : 「チュルペン」と発音) と「イスラーム」または「イスラーム的 (Islami)」という単語が合わさって、*cerpen Islam* あるいは *cerpen Islami* と呼ばれるものである。『アニーダ』は、1993年の誌面改革以降、このイスラーム短編小説を専門に扱う雑誌と認識されるようになっていった。

短編小説を専門に掲載する雑誌は、インドネシアでは『アニーダ』が最初ではない。『アニーダ』以前のよく知られた雑誌として、1980年代に多くの若者に読まれた『アニタ・

チュムルラン (Anita Cemerlang)』がある。『アニタ・チュムルラン』は、1979年に創刊し、2002年まで続いた隔週刊誌であり、同時期に流行したポップ・ノベルの流れを汲み、若者言葉によって若者の日常を描く短編小説を多く掲載した。1980年代には、国内唯一のルマジャ向けの短編小説専門誌として、多くの若者の人気を集め、またこの雑誌から著名なポップ・ノベル作家が多く輩出した⁷⁾。編集長ヘルフィをはじめ『アニーダ』の編集者たちは、1980年代に皆、ルマジャの時期を過ごし『アニタ・チュムルラン』の成功に触発されている。『アニタ・チュムルラン』の戦略やスタイルを一部取り入れながらも、イスラームの価値を若者に伝えるということを使命に、イスラーム短編小説を掲載する『アニーダ』を作っていったのである。

またイスラーム小説 (*sastra Islam*) について、ヘルフィは、3つの条件を挙げている。一つめは、作者がムスリムであり、宗教的純潔に関し責任を持てる人物であること。なぜならば、作者にとってイスラーム小説は、神とウンマ⁸⁾へのイバーダ⁹⁾の実践と、その表現だからである。二つ目は、作品がイスラームの教えに沿うものであり、イスラームのシャリーアに反するものでないこと。そして読者にそうとは気が付かれないうちに、善行を伝え悪行を避けるよう仕向ける内容であること。三つ目は、作品が普遍的なメッセージを含み、あらゆる社会にとって効用をもたらすものであること。なぜならばイスラームは、普遍的な教えを有しているからである (Helvy 2003: 6-8)。

- 5) 1993年頃からアニーダが焦点を絞ったルマジャと呼ばれる年齢層は、成人と子供の間位置する年齢層で、一般に10代後半から20代初め頃の若者たちを指す単語である。教育水準が向上し、中間層が出現し始めたスハルト体制中期以降、都市で学生生活を過ごす中高生あるいは大学生たちを指す言葉として、一般的になっていった。
- 6) 『アニーダ』編集部の内部資料「アニーダ概観 (Sekilas Annida)」による。2004年に筆者が編集部への調査を行った際に入手したもの。
- 7) <http://nasional.kompas.com/read/2009/02/12/16113035/> 参照
- 8) ウンマとは、アラビア語起源で共同体、特にインドネシア語では、イスラームの共同体を指す。
- 9) イバーダとは、「神への崇拜や服従」を指すアラビア語起源の単語である。転じて、宗教儀礼、具体的にはイスラームの五行 (信仰宣誓、礼拝、喜捨、齋戒、巡礼) を指すこともある。

若いムスリマ向けの短編小説に特化するようになった1993年以降、2000年代前半まで、『アニーダ』は、継続して各号約45000部から50000部の発行部数を維持している。また1999年からは、その人気から、月刊での発行を変更し隔週刊で発行されるようになった。2000年代前半にかけ、ひと月に9万から10万人の読者に読まれていたことになる。2003年に『アニーダ』編集部が実施した読者アンケートによれば、読者の85%が女性であり、また、ジャカルタと隣接する3県を合わせた首都圏¹⁰⁾に住んでいる読者が73%を占めた。年齢は、15歳から19歳が40%、20歳から24歳が25%、25歳から29歳が14%であった。最終学歴あるいは現在の学年を尋ねた項目は、高校が47%、高等教育が15%という結果であり、高校在学以上の学歴を持つ読者が62%を占めていた。この調査結果から、『アニーダ』の典型的な読者層は、首都圏に住む比較的高学歴の若い女性たちだということがわかる¹¹⁾。

2.3 単行本全盛期

スハルト体制が崩壊した1990年代末以降、若いムスリマ向け短編小説は、単行本として出版されるようになった。これらの単行本は、1980年代半ばに創設されたイスラーム系出版社大手のミザン (Mizan) やグマ・インサーニ・プレス (Gema Insani Press) の他、スハルト体制崩壊前後に新しく創設されたシャアミル (Syaamil) やエラ・インターメディア (Era Intermedia) などの新興イスラーム系出版社からも多く出版された。雑誌『アニーダ』の編集部や作家たちの多くが、大学ダアワ運動の出身であったのと同様に、これらの出版社の創設者や編集部には、大学

ダアワ運動に参加していた人たちが多く含まれていた。イスラーム小説の出版サイドの人々の中には、大学ダアワ運動を通じて、『アニーダ』編集部や、若いムスリマ向けの短編小説を執筆する作家たちと、もともと交流を持っていた人たちが多かった。またこの時期には、大学ダアワ運動の学生たちを創設母体とする正義党 (2002年に福祉正義党への改名) が勢力を広げた時期でもある。上記の出版社の中で、シャアミルやエラ・インターメディアは、大学ダアワ運動出身で、後に正義党の黨員になった人々が編集部の中核を占めていた。短編小説の作家の多くも、大学ダアワ運動に参加していた人たちであり、正義党の支持者が多いと言う点でも、各出版社とはつながりが強かった。

たとえばバンドゥンで1999年に創設されたシャアミルは、バンドゥン工科大学でダアワ運動に参加していた学生が創設した出版社である。バンドゥン工科大学は、1970年代にイスラーム活動を志す学生たちに対するダアワのトレーニングを実施し、全国の学生を集めたサルマン・モスクを有し、1980年代半ば以降は、学内の学生ダアワ組織でタルビヤが採用され、先駆的な活動が展開した。ジャカルタのインドネシア大学と共に大学ダアワ運動の拠点として知られている (野中2009)。シャアミルを創設したのは、学生時代にサルマン・モスク及び学内のダアワ組織で活動した学生たちだった。大学卒業後も、社会に対しダアワを継続して行っていきたいと考えていた彼らは、1990年代の『アニーダ』の成功を見て、こうした短編小説を単行本として出版することを第一の目的に、シャアミルを創設した。創設から数年の間、シャアミルでは、出版する書籍の半数以上が、この若

10) ジャカルタに隣接する3県とは、ボゴール県、タンゲラン県、ブカシ県であり、首都ジャカルタとこの3県の頭文字を取って、首都圏を意味する「ジャボタベック (Jabotabek)」という呼び名が一般的である。また近年は、これにジャカルタ南部に隣接するデボック市を合わせ、「ジャボデタベック (Jabodetabek)」という呼称が使われることも増えている。

11) 『アニーダ』編集部内部資料「2003年アニーダ・データ (Data Annida 2003)」による。2004年の調査に筆者入手。

いムスリマをターゲットとしたイスラーム小説や短編小説集だったという¹²⁾。後述するヘルフィ・ティアナ・ロサ著『ガガ兄さんが旅立つ時』や、ムスマイナ (Muthmainnah) 著『ピンカン』など、女性向けイスラーム短編小説の代表的な作品が、2000年代初頭シャアミルから次々と出版された。

またイスラーム出版社大手のミザンでも、この時期、多くのイスラーム小説が出版された。ミザンは、1980年代半ばに、バンドゥン工科大学のサルマン・モスクでダアワ運動に参加していた学生たちが中心となり創設された出版社である。シャアミルとは創設の時期が異なり、またミザンでは、シーア派やスーフイズム、西欧で出版されたイスラーム関連書など様々なイスラーム思想を扱うほか、小説や児童書、イスラームとは直接関係のない自己啓発書やビジネス本まで、幅広いジャンルが出版されている。2000年代初頭から、ミザンではイスラーム短編小説をイスラーム・ルマジャ小説 (Novel Remaja Islami) と呼び、専門の部門を作り、出版した。作品のクオリティや文体の軽さから、「文学 (sastra)」と呼ぶのではなく、「小説 (novel)」とするほうがふさわしいと考えられたのである。また、これらの作品が中高生から大学生頃の若者たちをターゲットに書かれたことから、部門名には「ルマジャ」という用語が用いられた。2000年から2005年の間、ミザンでは1か月に2～4タイトルのイスラーム・ルマジャ小説が出版された。平均すると、1作品あたり5000部から10000部を売り上げたという。当時、3000部から5000部売れば成功とされる小説部門にあって、イスラーム・ルマジャ小説の人気は非常に顕著だった¹³⁾。

イスラーム短編小説が、この時期に非常に多く出版されたのは、作家と出版社が協同して立ち上げた「ペンの輪サークル (Forum Lingkar Pena, 以後 FLP)」の役割に依るところが大きい。FLPは、雑誌『アニーダ』編集長だったヘルフィが、1997年に実妹で作家のアスマ・ナディア (Asma Nadia) と、同じく『アニーダ』に短編小説を投稿してきた人気作家ムスマイナを誘って、3人が発起人となり創設した組織である。インドネシアの多くの若い人たちに、作品を書く機会とスキルを提供し、社会に対して質の良い作品を提供したいという思いから作られた組織であった。雑誌『アニーダ』の成功で社会におけるイスラーム的短編小説の需要が高いことを感じていた彼女たちは、より広い活動の場を求め、またより多くの若者を巻き込むことを目指したのである。創設時に設定されたFLPのヴィジョンには、「読むことと書くことを愛するインドネシアを創設し、インドネシアにおいて、質の高い作家たちのネットワークを築き、ウンマに対し光明を与えるための作家たちの育成を目指す」ことが記されている。30名ほどの創設メンバーには、ヘルフィやアスマなど著名なイスラーム短編小説作家の他、これらの作品に共鳴し、多くの人たちに広めていきたいと考えるイスラーム系出版社の人たちも名を連ねた。出版社の編集部門で働く彼らは皆、個人で、このFLPに参加していた。出版社の編集という立場と共に、彼らの多くは、学生時代からイスラームのダアワを志し、社会人として出版社に就職して以降も、出版を通じて、イスラームを広めていきたいという気持ちを持っている人たちであった。創設直後から、FLPでは、小説の執筆や読書に興味がある若者を対象

12) 若い女性向けの短編小説以外に、シャアミルでは、子供向けイスラーム本、イスラーム的ビジネス書などが多く出版されている。シャアミル創設者で編集担当のハルフィノ (Halfino) のインタビュー (2007年6月27日実施)。

13) ミザン編集部ベニー (Benny)、広報担当ファン・ファン (Fan Fan) のインタビュー (2012年1月27日)。

に、インドネシア各地でワークショップやセミナー、講演会などが実施され、多くの若い作家たちを育てると共に、イスラーム系出版業界のネットワークを築き、この時期のイスラーム短編小説出版のブームに、大いに貢献したのである。創設から6年後、2003年のデータでは、FLPのメンバー数は約5000人であり、そのうちの7割以上が、15歳から25歳のムスリマたちであった。FLPの創設や活動は、『アニーダ』の誌面で告知され、またメンバーの勧誘も積極的に行われた。2003年時のメンバーのうちの2000人以上が、『アニーダ』を通じて登録した人たちであった(Helvy 2003: 42-44)。

1990年代から2000年代前半にかけては、『アニーダ』とFLP、それに作家たちとイスラーム系出版社の編集部が多くが、ダアワ運動の活動家であり、お互いに職種を超えたネットワークでつながり、協力関係を築いていた時代であった。また読者の多くも、大学や高校でダアワ運動やイスラーム活動に参加したり、あるいはこうした活動を支持した女性たちであり、似たような境遇にいる作家たちを身近に感じる人々であった。この時期のイスラーム短編小説の人気は、こうしたネットワークと共有された意識の中で醸成されたものだと言える。

2.4 人気の終焉

しかしながら、このイスラーム短編小説の人気も、2000年代半ばを過ぎると終焉を迎えることになる。2000年代前半、イスラーム短編小説を出版し、成功を取めたいずれ

の出版社でも、2005年以降は、この種の書籍が売れなくなったと述べる。その理由について、ミザンでは、1990年代に『アニーダ』を読んだ世代、あるいは2000年代前半に単行本を読んだ世代が成人し、いわゆる「ルマジャ」の年代ではなくなったこと、その一方で、2000年代半ば以降は、イスラーム書籍市場に多くの本が流通し、選択肢が広がって、イスラーム短編小説を誰もが読む時代ではなくなった、と評価している¹⁴⁾。また、ミザンと同様、1980年代半ばに創設されたイスラーム出版社大手のグマ・インサーニ・プレス¹⁵⁾では、2000年代前半の人気に乗り、あまりに多くの作品が市場に出回った結果、こうした種類の作品の目新しさがなくなったこと、多くの出版社が、まだ駆け出しの作家たちを次々に発掘し執筆させた結果、作品のクオリティが低下し、どの作品も二番煎じ的な印象が否めなくなったことなどが挙げられている¹⁶⁾。

1990年代には多くの中高生や大学生のムスリマに読まれた雑誌『アニーダ』も、2005年を境に休刊した¹⁷⁾。

この時期にはすでに、イスラーム的価値観が社会の中に浸透し、また、スハルト時代には厳しく監視され制限されてきたダアワ運動をはじめとする大学生のイスラーム的活動も、全国各地の大学にまで広がって定着した。それ以前には、圧倒的に少数だったイスラーム式のヴェールの着用者も急増し、若い女性たちの間では、一般的な服装になりつつあった。こうした中で、かつて短編小説を読むこととお互いにつながり、連帯意識を持ち、イ

14) 同上のインタビュー (2012年1月27日)。

15) ジャカルタで、1980年代半ばに創設された。創設当初から、出版を通じたイスラームのダアワを目指す。創設者はアラブ系人物で、必ずしも大学ダアワ運動とは関わりがないが、編集部には、2000年代、大学ダアワ運動出身者が多かった。グマ・インサーニ・プレス幹部のイワン (Iwan)、ルマジャ部門編集担当ミミン (Mimin) へのインタビュー (2007年6月30日)

16) 同上のインタビュー (2007年6月30日)。

17) アニーダは、現在、オンラインメディア (<http://www.annida-online.com/>) として、ウェブサイトやツイッターなどでの情報発信を続けているが、1990年代から2000年代前半に持ち合わせた社会的影響力は、すでに失っていると看做されるを得ない。

スラームへの思いを高め合った世代は大人になる一方、次の世代には、短編小説は必ずしも必要とされなくなったのである。

3. 作品分析

ここでは、1990年代に『アニーダ』に掲載され、その後1990年代末から2000年代にかけて単行本として出版された2つの作品を分析し、イスラーム短編小説の特徴を考察する。取り上げるのは、ヘルフィ・ティアナ・ロサ著「ガガ兄さんが旅立つ時 (Ketika Mas Gagah Pergi)」と、アスマ・ナディア著「イムット (Imut)」の2作品である。ヘルフィとアスマは、姉妹であり、1990年代以降に人気を博したイスラーム短編小説の二大作家とも呼べる二人である。両者とも、短編小説やエッセイなど多くの作品を執筆しているが、以下に論じる「ガガ兄さんが旅立つ時」と「イムット」は、共に雑誌『アニーダ』に掲載され、その後、単行本になって出版された。これらは作家としての両者の初期の作品であり、彼らの知名度を一気に高めた作品とも言える。

3.1 「ガガ兄さんが旅立つ時」

同作品は、雑誌『アニーダ』の編集長を長くつとめたヘルフィ・ティアナ・ロサによって書かれた女子高生のギタと、インドネシア大学の学生である兄ガガの物語である。大学入学後、大学でダアワの活動に参加し、敬虔なムスリムになったガガの変化が、ギタの目を通して描かれていく。ガガ兄さんの変化を最初は受け入れられないギタであるが、ガガの生活の様子や、ダアワの活動に触れ、会話を重ねるうちに、次第にギタ自身も、イスラームへと心が動いていく。ガガ兄さんから、再三勧められていたジルバブの着用を決意した日、ガガ兄さんは交通事故でこの世を去る、というストーリーである。

「ガガ兄さんが旅立つ時」は、雑誌『アニー

ダ』に、1993年に掲載され、また1997年には、『アニーダ』編集部の出版部門ブスタカ・アニーダより、単行本として出版された。『アニーダ』に1993年に掲載されて大きな反響を呼んだ作品の出版であり、『アニーダ』誌面での出版前からの宣伝広報活動によって、出版以前に、初版の10000部はすでに完売の状況だったという。その後、2000年には、出版社シャアミルから再版され、現在に至るまで15版以上の再版を重ねている。さらに、2011年には、初版の15ページが64ページにまで加筆され、『ガガ兄さんが旅立つ時—そして再び』(Ketika Mas Gagah Pergi—dan Kembali) というタイトルで、改訂版が出版された。

同作品は、このようなデータを見る限り、数あるイスラーム短編小説の中でも、特に反響の大きかった作品と言える。また執筆者自身、2004年以降継続して実施してきた調査の中で、1990年代から2000年代初頭にかけてルマジャ時代を過ごした女性たちから、「この作品を読んでヴェールを着けることを決意しました」とか、「この作品がきっかけでヴェール着用を始めました」という話を何度も耳にした。ヘルフィ自身も、出版社シャアミルから出版された2000年版の前書きの中で、同作品に対する読者の反響が他の作品に対して非常に大きかったこと、作品を読んでジルバブを着けるようになったとか、イスラームの勉強への意欲が高まったという声が多く寄せられたことを挙げている (Helvy 2000: x)。「ガガ兄さんが旅立つ時」は、数あるヘルフィの作品の中でも、最も知られた代表作と言える。

作品では、イスラームを受け入れ、ダアワの活動に従事するようになったガガ兄さんの変化、そして当初、兄の変化に驚き、反発しながらも、次第にその変化に影響を受け、ジルバブを着けることを決意するギタの変化が、ギタ自身の言葉によって語られていく。

ガガ兄さんの変化と、それに対するギタの

拒絶を分かりやすく示すのは、音楽や服装といった象徴的な事象である。たとえば、ガガの好んで聞く音楽の種類が、それまでの西欧風のものから、ナシッド (nasyid) と呼ばれるアラブ的かつイスラーム的な音楽に変わる。それについての妹ギタの指摘とガガの返答は次のようなものである。

ギタ：「ガガ兄さんのカセットを聞くと、うんざりするし、それに気分が落ち込むのよ。アラブの音楽ばかり聴いて、私たちがアラブ人だとも思ってるの？」

ガガ：「これは、ナシッドだよ。単にアラブの音楽というだけでなく、ジキル¹⁸⁾も含まれてるんだ。」

ギタ：「本当にびっくりよ。ガガ兄さんの音楽の趣味は、どうしてこうなっちゃったの？ スコーピオンズとか、ワムとか、クイーンやエリック・クラプトンのカセットは、どこに行っちゃったの？」

ガガ：「おいおい、これはそういうものとは違うんだよ、ギタ！ スコーピオンズやエリック・クラプトンを聴いても、何かの役に立ったり、しかもメリットがあるとは限らないだろ。でも、ナシッドは違うよ。ナシッドを聴けば、イスラームを口ずさむことが出来るんだ。」

ナシッドは、アラブ風の曲調で、男性ボーカルグループが基本の音楽ジャンルであり、歌詞にはイスラームのメッセージが含まれている。1990年代以降、ダアワ運動などイスラーム活動に参加する大学生を中心とする若者たちからの人気を集めた。1990年代当時、インドネシアでも流行していたスコーピオン (Scorpions) やワム (Wham!)、クイーン (Queen)、エリック・クラプトン (Eric Clapton) など、西欧のバンド音楽から、ナ

シッドへと、ガガの音楽の好みが移っていったことを示すことで、ガガの現代的イスラームへの傾倒が示されている。

次に、ガガの服装の変化に対するの応答は、ギタではなく母の指摘から始まっている。それに対するガガの返答とギタの反応は、先の音楽についての兄妹のやり取りに類似している。

母：「ガガ、あなたの服装は、ずいぶん変わったわね。」

ガガ：「変わったって、どんな風になあ、母さん？」

母：「そうね、前みたいにおしゃれでは、なくなったわね。ダンディーでもないし。だってこれまであなたは、アメリカの西部劇みたいな服装をするのに、ホントに気を使っていたじゃない。」

ガガ：「これが気に入っているんだよ、母さん。質素だけど、清潔だし、整っているだろ。礼儀正しくも見えるし。」

ギタ：そうですね、私の意見では、ガガ兄さんの外見は、中年のおじさんみたいになっちゃいました。長袖のシャツに、幅広の長ズボンで、「まるで、ギノさんみたい」と、私は兄さんにコメントしました。まるで、うちの運転手のギノおじさんにそっくりの格好なんです。

さらにガガの変化は、女性との関わりを切り口にしても、示されている。それ以前、ガガは女の子と冗談を言い合ったり、交友したりするのが好きな男子学生であった。それがイスラーム的に変化を遂げて以降は、女性との距離を保ち、直接肌が触れるのを避け、挨拶の時の握手も断るようになった。このことを、ギタに批判されて、ガガはギタにハディース¹⁹⁾を読むように勧めるのだった。

18) ジキル (zikir) とは、アッラーを讃え、アッラーの名を唱える祈祷のことを指す。

19) 預言者ムハンマドの言行を記録したもの。ハディースは普通、ムハンマドの発言や行いを示す部分と、それを伝承した者を記述した部分とに分かれる。概説的な命令が記述されたクルアーンを

ギタ：私は、大きな声で読み始めました。「アーイシャの語ったところによる。アッラーのため、アッラーのため、アッラーのため。聖預言者は、自分の妻や娘など家族以外の女性と、握手をしたことがなかった。ブハーリとムスリムの伝承による。」(中略)「でも、キアイ・アンワールは、母さんと握手して挨拶するわよ。ハジ・カリも、ハジ・トトも、ウスターズ・アリも……」²⁰⁾。

ガガ：「聖預言者が、最も良い手本(uswatun hasanah)ではないのかい??」

ハディースを読まされても納得できないギタは、近所の伝統的なウラマーの挨拶の仕方を指摘して反論するが、ガガは、ウスターズやウラマーと呼ばれる人たちよりも、預言者ムハンマドが、最もよい手本だと論じている。インドネシアのムスリム社会における土着の宗教権威への盲目的な崇拜を批判し、クルアーンとスンナ²¹⁾に戻ろうとするイスラーム改革思想の影響が表われた箇所だと言える。

音楽や服装、女性との関わりなどの観点から、変化が象徴的に示されているガガと比べ、ギタの変化は、分かりやすい象徴を用いて描写されてはいない。ギタの発言を通して、その変化の兆しが示されているだけである。

物語の初めの頃のギタは、変化を遂げたガガに拒否反応があからさまであり、その変化に戸惑い反発する発言ばかりが目立っている。たとえば、ギタの心は、以下のように描写されている。

ここ数ヶ月で、兄さんは大きく変わってしまったのです。しかも、急激に！今では、私の知っている兄さんではないように感じ

ます。私は悲しいのです。大事なものを失ったみたいです。

ふん、何さっ。ちょっと前までは、ガガ兄さんだって、お転婆な私の格好に、何の文句もつけなかったのに。

“可愛い妹よ”？“分かるだろ”？ あー、もううんざりっ！

こうした反発は、ギタ自身の変化のプロセスの中で、次第に変化を遂げていく。ガガの活動に触れ、ガガとイスラームについて長い時間、会話をした後、ガガに、「兄さんの言っていること、分かるよなあ？」と聞かれた時のギタの返答である。

「心配しないで。ギタにだって、分かるわよ。」私は、正直に答えました。そんなに深くではないけれど、理解できているつもりです。その夜、私は、ガガ兄さんのイスラームの本を沢山借りて、積み上げた本の側で寝ました。どうやら私も、ヒダーヤを得たみたいです！

ヒダーヤという言葉は、「神の導き」という意味を持つ。インドネシアでは、1980年代以降、イスラームに目覚めジルバブを着ける決心をした若い女性たちが、その理由をこの「ヒダーヤ」という言葉で表現した(野中・奥田 2005: 20-21)。こうしてヒダーヤを得たギタは、物語の最後には、ジルバブを着用する決意をすることになる。

同作品には、インドネシアのムスリムたちの現状に対する作者ヘルフィの問題意識が、色濃く表れている。この問題意識は、ダアワの活動に従事するガガの言葉を通じて伝えら

／ 補完し、具体的な内容を伝えるものとしてムスリムに参照されるものである。

20) キヤイ、ウスターズ(ustadz)は、イスラームの知識が豊富な先生、を指す言葉。インドネシアでは、伝統的には、ブサントレンで指導する先生を指す言葉として前者が使われてきた。昨今、外来語としてのアラビア語の採用が目立っており、後者はその流れの中で、好んで使われるようになっていく。また、ハジ(haji)は、メッカ巡礼を終えた人に対し、名前の前に付ける尊称。

21) スンナ(sunna)とは、そもそも慣行や慣習を指すアラビア語であるが、イスラーム用語では、預言者ムハンマドの言行を指す。ハディースから得られる知識の体系であり、クルアーンに次いで、ムスリムが従うべき規範である。

れている。ガガが、自分の考えをギタに論ずる箇所では、イスラームのウンマ全体に対しての、作者ヘルフィの問題意識が明らかになっている。

「兄さんは、悲しいんだ。アッラーや、聖預言者や、イスラームが、低く見られていることに。ウンマの多くの人たちが、クルアーンやスンナから離れてしまい、ウンマが分裂してしまっていることに。それに、兄さんが幸せな気持ちで、穏やかにイバードを行っている時、世界の裏側では、虐殺の危険にさらされ、路上で食べ物をあさり、屋根のないところで寝るしかない、同胞のムスリムたちがいるんだ。」

作品の舞台は、インドネシア国内のローカルな設定であるが、ガガの言葉を借りて、広いイスラーム世界の現状に無関心なインドネシアの若いムスリムたちの態度を改め、こうした現実を目を向けるよう、ヘルフィが読者に促している箇所だと言える。

また、別の箇所では、インドネシア大学のイスラームの講演会で、講演者の一人となって登壇したガガが、ムスリマの地位やヴェールについて、以下のように語っている。ここでは、イスラームの女性の扱い、またムスリマの服装に関する誤解や偏見について、その問題意識が明らかである。

「明らかに、女性を尊重し、女性の地位を認めているイスラームが、ジルバブの着用を規定しているという理由だけで、なぜ女性を抑圧していると言われてしまうのでしょうか。ジルバブは、敬虔さを示す服装で、ムスリマのアイデンティティであるにもかかわらず、私たちのムスリマ自身によって、イスラーム教徒たち自身によって、敬遠されてしまっているのです。」

「ガガ兄さんが旅立つ時」の主人公ギタは、当初、必ずしもイスラーム的ではなく、むしろ兄ガガのイスラーム的な変化に反発を覚える女子高生である。また彼らの父や母も、ガガの変化に戸惑う様子が描かれており、必ずしもイスラーム的ではない都市部の核家族という設定がなされている。主人公ギタは、まさに、雑誌『アニーダ』の読者たち、あるいは1990年代から2000年代初頭にかけて、イスラーム短編小説を好んで読んだ女子学生たちの等身大の姿であり、ギタの家族は、読者たちの家庭環境と重ねることが出来る。一方で、イスラームに目覚めたガガの言動には、作者ヘルフィが、あるいは読者たちが目指すべきムスリム像が表われていると言えるだろう。読者と等身大の主人公ギタの兄ガガ、という身近な人物の発言や行動を通じて、手本とされるムスリムの姿が提示されているのである。また、このガガの発言の中に、作者ヘルフィが読者に伝えたい、現在のインドネシアやイスラーム教徒たちが抱えている問題点が、明らかにされている。物語は、ガガと妹のギタがイスラーム的に変化を遂げるプロセスを描くものである。心の、いわば内面の変化の表象として、ジルバブやイスラーム服、イスラーム的音楽であるナシッド、異性との関わり方の変化などに、焦点があてられている。これら象徴的なアイコンは、他のイスラーム短編小説でも、登場人物の内面の変化を語る際に、頻繁に使われるものである。

3.2 「イムット」

同作品は、アスマ・ナディアによって書かれ、1994年に雑誌『アニーダ』に掲載された。主人公のイムットは、太った女子高生であり、自分の高校のイスラーム組織の活動に参加して、2か月前からジルバブを着用している²²⁾。あるイスラームの勉強会で、「最後の審判の日、自らの報酬よりも、体重の方が

22) 物語の主人公の名前である「イムット」は、そもそものインドネシア語では、「かわいい」という意味を指す単語である。

重いと言うことがないように」という先輩の話聞いて以降、太っていることに悩み、他の人へのダアワがうまくいかないのも、自分が太っているせいにしてしまう。ダイエットを試みるものの体重は減らないが、最後に、先輩や友人の助言や支えで、外見よりも心の清廉さの方がずっと重要だと知る、というストーリーである。

作者アスマは、現在に至るまで、イスラーム短編小説を含む文学作品やエッセイなどを次々に出版する売れっ子のムスリマ作家である。彼女の最初期の作品の一つである「イムット」は、1994年に『アニーダ』に掲載されて話題となり、同年の『アニーダ』イスラーム短編小説コンクールの第1位に選ばれた。さらに2001年には、創刊から10年たった『アニーダ』に掲載された短編小説の中で、編集部が選んだ最高傑作20作品に選ばれ、『光を編む —「アニーダ」最高傑作作品集 (Merajut Cahaya—Kumpulan Cerpen Terbaik Annida)』の中に掲載されて出版された。また、アスマ自身のイスラーム短編小説集『ディアンドラ星の輝き (kerlip bintang diandra)』の中にも掲載され、2001年に出版社シャアミルから出版されている。

物語は、主人公のイムットが、イスラーム的に2回変化を遂げる、そのプロセスが論じられている。イムットはロヒス²³⁾と呼ばれる校内のイスラーム組織活動に参加して以降、ジルバブを着用し、少なくとも見た目にはイスラーム的に変化した。これが第一回目の変化である。けれども、ロヒスに参加したのも、ジルバブを着用したのも、完全なる信仰心からというわけではなかった。たとえば、ロヒスに参加した理由について、次のように書かれている。

イムットが、他のグループ活動ではなく、ロヒスの活動を続けてきたのも、ただ単に、ロヒスでは、イムットが太っていることを取り立てて言う人がいなかったからだ。

この時点でのイムットは、外見上のイスラーム的变化を志向する女子高生であり、内面の変化が伴っているとは言えない。これは、複数の箇所でも描かれている、イムットの心の葛藤から明らかである。たとえば、イムットが太っていることを理由に、同級生からかわられる場面では、イムットはアッラーが、この同級生たちをデブにしてくれるようにと、つつい考えてしまい、後悔する。

もしできるならば、自分のことを何度も何度もからかうリオヤヨスやその仲間たちを、アッラーがデブにしてくれるように、とお祈りしたい気持ちにさえなった。

“アスタグフィルラー”²⁴⁾。イムットは、一人でアッラーに許しを願った。恥ずかしい、こんなひどいひらめきが、自分の心に湧き上がってくるとは。アスタグフィルラー！

またイムットは、ジルバブを身に着けた自分と、ジルバブを着用した友人たちの見た目と比較して、自分がどうして彼女たちみたいに可愛くならないのか、思い悩んだりもする。

友達の目に映る、尋常でなく太った自分の姿を、変えることは本当に難しかった。イムットは、どうしてだか分らなかった。なぜ自分がアーイシャみたいにならないのかを。イムットの近所に住むアーイシャは、ジルバブを着けた後、本当にかわいくなっ

23) ロヒス (Rohis) とは、ロハニ・イスラーム (Rohani Islam : イスラームの精神) の略。大学でダアワの活動が一般的になった1990年頃から、各地の高校でも、学内のイスラーム活動が一般的になり、ロヒスという名称で呼ばれるようになった。大学ダアワ活動の一環として、大学生が自分の出身高校や近隣の高校に出向いて、このロヒスの活動をサポートするなど、両者の関係は密接だった。

24) イスラーム教徒が、神に許しを請う時に唱える祈禱 (doa) の言葉。

ただ。フィラやドナもそう。彼女たちは、周りの友達から、とても尊敬されるようになった。それからヤンティ。ヤンティは、ムスリム服を着るようになって、お転婆をやめ、とてもおしとやかに変身した。

太っていることがコンプレックスのイムットにとって、イスラーム勉強会での敬愛するインタン先輩の言葉は効き目が強かった。このインタンの講演を聞いて以降、痩せようとする気持ちが一気に高まったのである。

「ここにいるムスリマの皆さん、私たちは常に自分たちの善行について考え、そしてすべての行動において、誠実でなければなりません。最後の審判の日、アッラーの秤が設置された時、私たちの体重の方が、私たちが集めた報酬よりも重いということがないように。そうだとしたら、なんと私たちの損失は大きいことでしょう。」

インタン先輩の言葉を聞いて、イムットは気が遠くなりそうだった。イムットは、話を聞く前から、周りの他の参加者と自分の身体を比べ、自分が太っているのを、改めて感じていた。それから、彼らのイバーダと自分のイバーダも比べていた。そしてその結果……、ふー、イムットはぞっとして、怖くなった。

この日から、痩せたいという気持ちは、とても強くなった。イムットは、最後の審判の日、インタン先輩が話したようには、絶対なりたくなかった。

インタン先輩の言葉に触発されて始めたダイエットであったが、結局、その効果が上がらず、イムットの体重はほとんど減らなかった。その代わり、急激なダイエットの結果、イムットは体調を崩し、寝込んでしまう。病

床のイムットに対する両親の献身的な看護や、ロヒスの友人たちの励ましに触れ、またお見舞いに来たインタン先輩からアドバイスをもらって、イムットは、2度目の変化を遂げる。すべてを自分の太っているせいにして、外見だけに囚われていた自分に気づき、真に大事なことに目を向け始めるのである。それまでのイムットの間違えは、お見舞いにやって来たインタン先輩の言葉に集約されている。

「太っていても、痩せていても、すべてがアッラーから与えられたものなんです。すべてのことに、確かな英知²⁵⁾ があるんです。もしすべての人が痩せていたら、あるいは全部の人が太っていたら、世界はさびしいものになっているはずですよ。」

(中略)

「一番大切なのは、体つきではなくて、心よ。身体は、もちろん、きちんと維持されて、バランスよく、必要に応じて気遣う必要がある。それに、行き過ぎもいけない。でも、心の清らかさを維持する方が、ずっとずっと重要なよ。アッラーは、人の心だけを見るの。その人の外見が綺麗か醜いか、痩せているか太っているかを見るのではないのよ。」

また、ヒダーヤやダアワについても、インタンの言葉によってイムットの理解を正す手法が採られている。自分が太っていることで、友人エファに対するダアワに失敗し、エファがジルバブを着用する機会を逃したと話すイムットに対し、インタンがこう言葉をかけるのだ。

「ねえねえねえ、それいったい誰がイムットの身体のせいだって言ったの？ すべては、アッラーによって定められているんで

25) 英知 (hikmat) の基本的意味は、「ものごとを正しく判別するための知恵」。クルアーンの中では、神や預言者たちの持つヒクマへの言及が多く、またヒクマを持つものを意味するハキームは、99の神の名の一つ (大塚他 2001: 806)。

しょ。ヒダヤというの、誰かのせいだけで、もたらされないというようなものではないのよ。完全に、アッラーのご意志のままなの。エファや他の人たちがジルバブをまだ着けていないのは、たぶん、まだ時期が来ていないということ。私たちは、彼女たちのために祈ることができるだけよ。」

2001年に出版された『光を編む — 「アニーダ」最高傑作作品集』の序文の中で、当時『アニーダ』の編集長を務めていたヘルフィは、「イムット」を評し、「本来はとても重たい内容を、おかしな話に仕立てることに成功した」と述べている (Helvy ed. 2001: x-xi)。「イムット」は、平易で読者に馴染みの言葉を用い、当時の若者たちによるイスラーム受容やダアワの実践の問題点を指摘し、軌道修正を促す内容を含んでいたのである。

主人公イムットも、「ガガ兄さんが旅立つ時」のギタ同様、読者たちの等身大の姿と言える。「イムット」が書かれた1994年当時、『アニーダ』の読者の中には、学内のロヒスで活動する女子高生たちも多く含まれていた。ジルバブ着用やイスラーム活動への参加が、まだそれほど一般的ではなかった時期、女子高生一人一人がイスラームと向き合い、活動に参加することへの不安や葛藤も、大きかったと推測できる。主人公イムットのイスラームにまつわる様々な誤解や失敗、心の揺れ動きは、まさに読者である女子高生たちが、実生活の中で経験していることであった。読者は、イムットの言動や変化に自分を重ね合わせ、自分自身の活動やイスラームへの決意を再確認し、振り返ることができたのである。

3.3 イスラーム短編小説の特徴

前述のとおり、1990年代から2000年代初頭にかけて流行したイスラーム短編小説は、「ガガ兄さんが旅立つ時」や「イムット」を含め、雑誌『アニーダ』に掲載されたものだけでも、1991年から2001年までの10年間

でざっと1600作品と言われている。これらの作品、および作家たちの特徴には、いくつかの共通点を見いだすことができる。

まずは、若い女性が主人公という設定であり、その主人公の一人称の語り、あるいは彼女の視点や表現を通して、物語が進行するという点である。「ガガ兄さんが旅立つ時」では、妹ギタが主人公であり、彼女の一人称の言葉が物語を構成している。一方、「イムット」は、イムット自身の一人称の語りではないが、イムットの視点による描写を通じて、物語が描かれている。これらの作品で使用されるのは、若い女性たちの日常的な言葉であり、インドネシア語スラングとも言える表現である。ほとんどの作品において描かれるのは、都市部に暮らす女子高生や女子大生の日常生活であり、彼女たちが日々使用するスラング混じりのインドネシア語が、イスラーム短編小説の特徴の一つでもある。この点は、1980年代以降流行したポップ・ノベルの特徴と同じである。イスラーム短編小説の作家たちが、こうしたポップ・ノベルの流行を意識し、また影響を受けていた表われであろう。

しかしながら描かれる内容は、それ以前のポップ・ノベルとは全く異なっていた。イスラーム短編小説は、イスラームに向き合い、変化する主人公の体験や気持ちの揺れ動きが、主要なテーマとなっている。多くの作品で登場するのは、必ずしもイスラーム的な家庭環境に育ったわけではない若いムスリマであり、彼女が様々なきっかけによって、イスラームに触れ、イスラームに傾倒していく彼女の変化を描くというのが、この時期のイスラーム短編小説のスタンダードだと言ってよい。ここには、現代社会に生きる若いムスリマの葛藤、つまりイスラームの教えと、西欧の影響を受けた現代的生活様式や現代文化の狭間に揺れるムスリマたちの心の揺れ動きが描かれていると言えよう。

4. まとめにかえて

イスラーム短編小説の作家も、また読者の多くも、都市部に暮らし、高校や大学までの教育を受け、いわゆるルマジャの年齢を過ごすゆとりを持つ階層の女性たちである²⁶⁾。彼女たちは、同じ程度の年齢層で、教育水準で、また家庭環境も類似している。そして高校や大学で、イスラームに目覚め、ダアワを志す活動家たちであるか、あるいはこうした活動にシンパシィを感じている人たちが大多数を占める。両親や家族や周囲との軋轢を生じながらも、イスラームを学び、イスラームに目覚め、ジルバブを身につけ始めたか、あるいはジルバブを身につけることを意識し始めた女性たちなのである。

1990年代初頭から2000年代前半にかけ、多く執筆されたイスラーム短編小説は、作家の側から言えば、自らの学んだイスラームを、同世代の女性たちに伝えようとするムスリマ作家の試みであったと言えよう。『アニーダ』の編集長をつとめ、その後、FLPの代表をつとめたイスラーム短編小説の代表的作家ヘルフィは、イスラーム短編小説を書き始めた理由について、次のように述べている。

「ムスリム同胞団などのイスラーム思想書は、数多くインドネシア語に翻訳され、出版されていたけれど、女子学生たちの心に響くようなイスラーム小説は存在しなかった。小説は、読者が感情移入し、より身近に感じら

れるものであり、作家の側から言えば、説教されている感覚を読者に与えることなく、メッセージを伝えられる。」²⁷⁾

ヘルフィは、「私にとってイスラーム小説を書くことは、神へのイバーダであり、ダアワのための一つの手段」だと言う。中国系で結婚時にイスラームに改宗した母を持つヘルフィは、彼女自身も高校生の時に参加したイスラームの勉強会で、「初めてクルアーンをまじめに学び、ジルバブの意味を知って着用し始めた」。大学で参加したダアワ組織の活動を通じ、「ほんの小さなことでも自分が理解しているイスラームを人々に伝えることが、神へのイバーダであり、自らの英知を使って人々を善行に導くことがダアワ」だということを知った。ヘルフィや仲間の作家たちにとっては、小説を書くことが自らの英知であり、そこに自らが学んだイスラーム的価値を織り交ぜ、人々に伝えることを目指したのである。彼女たちにとって、イスラーム短編小説の執筆それ自体が、神へのイバーダであり、ダアワの実践だったのである²⁸⁾。

ヘルフィや、彼女と同じような意識を持つ女性作家たちによって書かれたイスラーム短編小説は、自らの行動や意識の変化を説明する言葉を求めていた同世代の女性読者たちに受け入れられていった。読者たちの多くもまた、ヘルフィや他の作家たちと同様に、イスラームに目覚めて日が浅く、中には、家族や周囲の反対を押し切ってイスラームの活動を続けたり、ジルバブを着け続けたりする人

26) 1980年代のルマジャ世代に大ヒットした大衆小説『ルプス』の分析を行った竹下は、「『ルマジャ』という言葉は単なる年齢的な概念ではなく、社会文化的な理解に支えられた概念である」と述べている(竹下2000: 43)。それ以前には、あるいは当時の農村社会では、子供時代を終えるとすぐに10代で結婚し、子供を産み、父や母となっていた若い人々が、都市部ではスハルト体制下の経済成長と教育水準向上に伴い、若者特有の文化を享受できる「ルマジャ」世代を形成するようになっていたのである。

27) ヘルフィへのインタビュー(2007年6月7日)。

28) 前述のとおりイバーダとは、イスラームの五行を指す言葉であると同時に「神への崇拜や服従」の意味を持つ。ヘルフィの話した「自分の理解しているイスラームを人々に伝えることが神へのイバーダ」とか「イスラーム短編小説の執筆がイバーダ」とは、神への崇拜や服従、つまり「神への信仰行為」という意味に理解すべきであろう。

たちも含まれていた。スハルト体制末期の1990年代からスハルト体制崩壊直後の2000年代初頭という時期には、イスラームを自ら学び、ジルバブを着け、主体的にダアワ活動を実践するこうした女性たちは、まだ社会の中で圧倒的な少数派であった。同時に、男性が主導するダアワ運動の中でも、彼女たちは少数派であり、必然的に追隨者的役割を担わされてきた。ダアワ運動で主導的立場に立ってきた男性たちが、中東発の運動書を必読書とし、政治的運動を展開していったのに対し、女性たちは、こうした必読書に触れ、男性たちの活動に歩調を合わせつつも、自分たち自身の活動を確立し、共有し、正当化し、イスラームへの意識をさらに高めてくれる言葉や社会的空間を必要としていたのである。イスラーム短編小説は、こうした女性たちの需要を満たす役割を果たした。つまりイスラーム短編小説とは、作家たちにとってのイスラームの宣教や、読者たちにとってのイスラームの受容のための効果的な手段や指針であると同時に、作家も読者も含め、ダアワ運動を通じてイスラームに目覚めたムスリマたちをつなぐ媒体だったと言えるのではないだろうか。

言葉を変えて言えば、イスラーム短編小説は、ポップ・ノベルの形態を踏襲しつつ、インドネシアの若いムスリマたちの自発的かつ能動的な創造の産物であった。大衆文化の一部であり、大量消費されるために書かれたポップ・ノベルに書き口は類似しているものの、イスラーム短編小説はその作家も読者も同じ意識を共有する若いムスリマたちであり、自らが主体的にイスラームを受容していることとする彼女たちをつなぐ有効な媒体であった。同時に、イスラーム小説は、イスラームを分かりやすく受け入れやすい形で、読者に伝える手段としても機能した。各作品の中では、読者たちに身近な題材と人物設定によって、彼女たちに到達可能と思わせるムスリムの理想像が描かれている。女性たちは、イスラーム短編小説を読むことを通じ、また、

『アニーダ』を読み、FLPの活動に参加することによって、自らがイスラームを受容するやり方は間違っておらず、理想に近づいているということを確認し、意識を共有する仲間がいることを感じることもできたのである。

しかし、2000年代半ば以降、このイスラーム短編小説の全国的なブームは沈静化していった。その理由の一つには、2000年代半ば頃までに、インドネシア社会においてイスラームが急速に受容され、イスラーム的であることが良いことという価値観が定着したことがある。イスラーム短編小説を受容してきた若いムスリマの間でも、イスラームが広まり、ジルバブの着用が急速に一般化して、これまで圧倒的な少数であったジルバブ着用者が急激に増加し、むしろ多数派を占めるようになった。イスラームに目覚め、イスラームに傾倒する女性たちが少数派だった時代には、彼女たちをつなぎ、彼女たちの活動や意識を正当化するために必要とされていたイスラーム短編小説へのニーズが、彼女たち自身が多数派を占めるにつれて、弱まっていったと考えることができる。同時に、この時期には、短編小説以外の手段によって、女性たちがイスラーム的情報を得たり、つながったりしやすくなっていた。大学ダアワ運動が広まり、多数の女子学生が参加するようになると、各大学のダアワ組織にはムスリマ部門が作られて、女子学生たちが主体的に活動するようになった(野中2010b)。また情報技術の革新によって、若者の間では、携帯電話のショートメッセージで情報を共有し、インターネットを介してフェイスブック上でつながるといったことが日常的になっていった。2000年代半ば以降のインドネシア社会におけるイスラーム的価値観の広がり、女性たちをつなぐ媒体の多様化などにより、イスラームに目覚めた女性たちにとってのイスラーム短編小説の役割は、大きく低下したのである²⁹⁾。

イスラーム的価値が広がりを見せた2000

年代半ば以降、イスラーム短編小説に変わり社会に受容されブームとなったのは、イスラーム的価値を含む、より長編の小説であった。小説の出版と共に映画化も伴い、書籍と映画の相乗効果でヒットする作品が目立つようになった。イスラーム短編小説の作家は圧倒的に女性が多かったのに対し、この時期の人気作家には男性作家も目立っている。イスラームのダアワを前面に押し出すことなく、物語全体として、イスラーム的価値を暗示的に伝えてくれるような作品が受け入れられていった³⁰⁾。2000年代後半は、大学ダアワ運動から生まれた福祉正義党が2000年代前半の躍進の後、現実路線の採用やスキャンダルの露呈によって支持を失っていく時期でもあった。ルマジャ時代にダアワ運動に参加し、イスラーム短編小説を読んだ女性たちは、すでに成人し、結婚して家庭を持つ年齢に達している³¹⁾。彼女たちの中には、かつて支持した福祉正義党から離れた人も少なくない。彼女たちもまた、2000年代後半以降は、こうした映画化を伴うイスラーム長編小説を読み、受容する人たちになっていったのである。イスラーム短編小説のブームが去った後、ルマジャ世代のニーズはどのように変化したのか、変化したニーズを満たすのはどのような作品だったのかは、また稿を改めて論じてみたいと思う。

参 考 文 献

- Asma Nadia, 2001, "Imut", Helvy Tiana Rosa ed. 2001, *Merajut Cahaya—Kumpulan Cerpen Terbaik Annida*, 149-158, Pustaka Annida
- Brenner, S, 1996, "Reconstructing Self and Society: Javanese Muslim Women and the Veil", *American Ethnologist* 23(4): 673-697
- Damanik, Ali Said, 2002, *Fenomena Partai Keadilan—Transformasi 20 Tahun Gerakan Tarbiyah di Indonesia*, Teraju
- Eickelman, Dale, F. and Jon W. Anderson, 1999, *New Media in the Muslim World: The Emerging Public Sphere*, Indiana University Press.
- Fealy, Greg and Sally White, eds., 2008, *Expressing Islam—Religious Life and Politics in Indonesia*, ISEAS
- Geertz, Clifford, 1960, *The Religion of Java*, University Of Chicago Press
- Helvy Tiana Rosa, 2000, *Ketika Mas Gagah Pergi*, Syaamil
- , ed., 2001, *Merajut Cahaya—Kumpulan Cerpen Terbaik Annida*, Pustaka Annida
- , 2003, *Segenggam Gumam*, Syaamil
- Heryanto, Ariel, 2011, "Upgraded Piety and Pleasure: the New Middle Class and Islam in Indonesian Popular Culture", Andrew N. Weintraub, ed., *Islam and Popular Culture in Indonesia and Malaysia*: 60-82, Routledge
- Irawanto, Budi, 2011, "Riding Waves of Change: Islamic Press in Post-Authoritarian Indonesia", Krishna Sen and David T. Hill, eds., *Politics and the Media in Twenty-First Century Indonesia*: 67-84, Routledge
- Muthmainnah, 2000, *Pingkan*, Syaamil
- Nilan, Pam, 2006, "The reflexive youth culture of devout Muslim youth in Indonesia", Nilan,

29) かつて作家や編集者が集い、イスラーム短編小説を量産し、若い女性たちのイスラーム覚醒に寄与したFLPは、現在でも5000人近いメンバーを有し、海外11の地域と国内100以上の町に支部(cabang)を有している。現在の活動は、海外や地方の支部で活発であり、海外で働く出稼ぎ労働者や、相対的に教育を受ける機会の乏しい地方に暮らす人々に短編小説の執筆を促すことで、彼らの知的水準の向上、幅広いネットワークの構築などに寄与している(2005年から2009年までFLPの代表を務めたIrfan Hidayatullahのインタビュー(2012年1月30日実施)、1999年から現在までFLP幹事長を務めるDianへのインタビュー(2012年1月31日実施))。

30) 2000年代半ば以降の映画化を伴うイスラーム小説の広がり和社会の受容の様子については、拙稿(野中2013)を参照。

31) 本稿で取り上げたイスラーム短編小説の作家たちも皆、成人し、家庭を持ち、新たな活動領域を見出す者がいる一方、活動が目立たなくなった者も多い。ヘルフィ・ティアナ・ロサは、大学で教鞭を取り、FLPの活動で地方や海外に頻繁に出向くなど、執筆以外の活動に従事する時間が多い。アスマ・ナディアは、活発な執筆活動を続け、「Emak Ingin Naik Haji」や、「Rumah Tanpa Jendela」など、いくつかの小説が映画化されて幅広い層の観客を集めた他、イスラーム的価値を含む彼女のエッセイは、同世代のムスリマの間で絶大な人気を誇っている。その一方で、ヘルフィとアスマと共にFLPを立ち上げたムスマイナは、すでに執筆を止めている。

- Pam and Carles Feixa, *Global Youth? Hybrid identities, pluricultural worlds*, 91-110, Routledge.
- Saluz, Claudia Nef, 2009, "Youth and Pop Culture in Indonesian Islam", *Studia Islamika* 16-2: 215-242.
- White, Sally and Maria Ulfah Anshor, 2008, "Islam and Gender in Contemporary Indonesia: Public Discourses on Duties, Rights and Morality", Greg Fealy and Sally White, eds., *Expressing Islam—Religious Life and Politics in Indonesia*, 137-158, ISEAS
- 大塚和夫他編 2001 『岩波イスラーム辞典』岩波書店
- 竹下愛 2000 「ポピュラー小説『ルプス』を読む —インドネシアのベストセラー小説にみる「開発の落とし子たちの心象—」『東南アジア—歴史と文化—』No. 29: 27-53
- 中村光男 1994 「インドネシアにおける新中間層の形成とイスラーム主流化」萩原宜之編『講座現代アジア 3 民主化と経済発展』271-306, 東京大学出版会
- 野中葉・奥田敦 2005 『インドネシアにおけるジルバップの現代的展開に関する総合政策学的研究 —イスラームと向き合う世俗高学層の女性たち』慶應義塾大学総合政策学ワーキングペーパーシリーズ No. 75
- 野中葉 2009 「インドネシアの学生ダアワ運動の原点 —サルマン・モスクにおけるイスラーム運動の展開」『Keio SFC Journal』8-2: 147-160
- 2010a 「インドネシアの大学生によるタルビヤの展開 —大学ダアワ運動の発展を支えた人々とイスラーム学習」『東南アジア研究』48-1: 25-45
- 2010b 「インドネシアの大学におけるダアワ・キャンパスの成立と拡大—組織と活動家に対する調査を通じて」『イスラム世界』75: 35-75
- 2013 「イスラーム的価値の大衆化 —書籍と映画に見るイスラーム的小説の台頭」倉沢愛子編『消費するインドネシア』269-290, 慶應義塾大学出版会
- 見市建 2004 『インドネシア —イスラーム主義のゆくえ』平凡社
- 2006 「イスラームの商品化とメディア」『アジア遊学 90 ジャカルタのいまを読む』117-127, 勉誠出版